

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般 - 48

学校名・団体名	静岡市立清水江尻小学校
HPアドレス	<a href="http://www.ejiri-e.shizuoka.ednet.jp/">http://www.ejiri-e.shizuoka.ednet.jp/</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	教育課程を社会に開く
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>少子高齢化社会の到来の中、人口減少の克服、地方の創生が大きな社会の課題として突きつけられている。本校を取り巻く状況も等しく、静岡市の中でも清水区は特に人口減少率が高く、学区の中心である銀座商店街の衰退、地域住民の高齢化が急激に進んでいる。</p> <p>今、学校を中心とした地域の再生と活性化が望まれ、学校は子どもの学びの場のみならず、地域コミュニティの核としての役割を果たすことが求められている。その屋台骨が地域人材を育成し、地域を創生するコミュニティ・スクールである。多用な人々との関わりの中で育まれる自己存在感や自己有用感は、持続可能な社会づくりの参画者としての意識を醸成していくであろう。</p> <p>こうしたコミュニティ・スクールの在り方に呼応し、社会の変化に目を向け、普遍的に部分を堅持しつつ、変化を受け止める「社会に開かれた教育課程」を模索していかなければならない。実現のためには、以下の2点の取り組みが必要であり、その先に新たな学校文化が形成されるであろうと考える。</p> <p>(1) 社会に開かれた教育課程を創造する。 (2) 社会に開かれた学びを創造する。</p>	

## 1 社会に開かれた教育課程の創造

### (1) 社会における教育過程の意識化

学校教育重点目標の共有と共通実践のためには、教育課程の主旨と構成の理解を深めていく必要がある。本校では、地域、家庭、学校において、「楽しさ」「繰り返し」「育ち合い」「達成感」の4つの過程を共有し、各々の諸活動はもとより、年間を通して重点月間を設けて意識化を図った。

教育課程の進捗状況及び評価については、学校運営協議会で熟議し、学校だよりやホームページで広報し、地域の方々や保護者を介して子どもたちにフィードバックした。

### (2) 社会における教育課程の遂行

#### ① 放課後子ども教室

家庭では学習習慣の確立を、学校では主体的に取り組む態度の育成を、地域では学びの環境整備と拡充を目指し、放課後子ども教室を平成28年6月より、週3日間開設した。外部講師を招聘しての特別講座、地域住民(シニアクラブ)との交流講座、異学年集団混在による主体的な学び合い活動等に毎日100名を超える子どもたちが足を運んだ。

#### ② 江尻っ子家庭学習ノート

「楽しさ」「繰り返し」「育ち合い」「達成感」の4つの過程を大事にするために、学校運営協議会が中心になって本校独自の自主学習ノートを制作し、全校児童に配布した。家庭、学校が連携して自主的な家庭学習の構築を図った。

#### ③ 子どもたちによる地域行事運営

敬老会、健全育成大会、交通リーダーと語る会等の地域行事においては、教職員の指導部会と学校支援部会の協議の上、子どもたちの主体性を引き出すために、行事運営の主体を子どもたちに任せる試みを行った。

#### ④ 地域防災合宿

地区防災委員、PTA通学合宿委員会が協働して、希望する高学年児童、地区住民、保護者による避難所の設営と体験合宿を体育館で実施した。

## 2 社会に開かれた学びの創造

### (1) 探究の過程を通じた主体的・協働的な学び(アクティブ・ラーニング)の創造

激変する近未来の社会を生きる子どもたちには、知的好奇心や探究心をもって主体的に学習に取り組む態度を養うことが極めて重要である。学びが社会に開かれ、子どもたちが生活圏である地域素材の中から、学習課題を設定することにより、「学びが自分事として成立しやすい。」「地域の多様な人々とのかかわりが生まれ、学びが広がりやすい。」「地域素材は授業時間以外に学びが深まりやすい。」

目的、必然性、意義、意欲にあふれた地域にかかわる学びは、地域への愛着や誇りを喚起させ、学びの実感や使命感を引き出し、達成感を味わうことができる。学びを学校内に留めることなく、地域社会に開くことにより、質の高い主体性と協働性が生まれる。

本校では生活科・総合的な学習の時間を軸として、育てるべき資質・能力を明確化し、以下の仮説のもと、主体的・協働的な学びを引き出す授業づくりを実践した。

仮説1 探究の過程(「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」)を重視した単元構想に基づく実践を積み重ねていくことで、子どもたちの主体的な学びが引き出されるであろう。

仮説2 思考の可視化と揺さぶりを意図的に設定することで、協働的な学びが発生する授業展開になるであろう。

### (1) 探究の過程を通じた主体的・協働的な学び(アクティブ・ラーニング)を引き出す授業研究実践

#### ① 探究の過程を重視した単元構想の工夫(仮説1)

第4学年では、地域の「ディ・サービス」をきっかけに、自ら計画を練った交流を行い、さらに相手意識に立った体験を経て、「江尻のまちは、お年寄りにとって住みやすいまちになっているだろうか」を問い、「自分のできることは何だろう」という自分事としての探究を目指した年間単元が実践された。

つけたい力を明確にした単元構想の重要性がクローズアップされるとともに、活用や探究の場を生活科や総合的な学習の時間の中で汎用的に生かしていくことができた。

探究の過程(「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」)を年間を通して、子どもたちの思考の流れに沿って繰り返していくことで、「地域に学ぶ」受動的な学びが「地域に貢献する」主体的な学びに変容していった。

#### ② 思考の可視化と揺さぶりを意図的に設定した授業づくり(仮説2)

思考の可視化と揺さぶりは、子どもたちの既成概念を打ち破り、簡単には答えの見つからない問題に対して、仲間と力を合わせて解決に向かわせるための教師からの働き掛けである。

第5学年では、総合的な学習の時間の第1時間目に、上記データをグラフと表で可視化して示し、思考に揺さぶりをかけた。3クラス中2クラスは清水銀座再生、1クラスは高齢者対策にかかわる課題を持ち、それぞれのクラス単位で探究的な学びを展開した。

協働的な学びにより、異なる視点から、多面的・多角的な学びが展開されるようになった。また、地域の人や仲間と力を合わせて行う学習活動は、相手・仲間意識を育み、学びの質を高め、社会に参画・貢献する力が育成された。

また、協働的な学びを引き出すために、教師は子どもたち個々の学びの状況を把握し、「聴いて」「つないで」「戻す」ファシリテーター役を意識し始めた。

### 3 総合的・横断的教育課程の創造

第5学年では、魅力ある地域の方と出会い、その人なりのこだわりを探究していく構想を立て実践した。教科学習の中で撮影の仕方を学び、道徳の時間に地域の方のこだわりについて知ることになった。このことが、教科学習(国語)のインタビューの仕方と結びつき、総合的な学習の時間の子どもまちぜみの開催やこだわり店長図鑑の発刊に結びついていった。

こうした総合的・横断的なカリキュラムを通して、子どもたちは、地域社会の見方や考え方を深め、地域への愛着を広げていった。

## 4 子どもと地域の変容

### (1) 子どもの変容

子どもたちからは、「進んでいろいろなことにチャレンジすると気持ちがいい」「自分で選び、自分で決めることが増え、やる気と責任を感じる」「地域のヒト・モノ・コトが身近になり、一層江尻のことが大好きになった」といった声が多く聞こえてくる。

#### ① 児童アンケートに見える学校満足度アップ

授業への関心・意欲、児童と教師、児童間の関係等、評価アンケート項目で年々学校満足度がアップした。

#### ② 一日当たり欠席率の減少

全校児童に対する一日あたりの欠席数を表した欠席率が、平成23年度2.7%、平成24年度2.5%、平成25年度1.3%、平成26年度1.0%、平成27年度0.8%と減少した。

#### ③ 標準学力調査経年比較で学力の大幅向上

標準学力調査(東京書籍監修・出版全国各学年15万人が施行)国語、算数を平成27年4月及び平成28年4月に実施した。下記グラフは6年生のデータであるが、国語、算数ともに、どの学年も全国平均を上回り、平成27年度結果を平成28年度結果が上回った。基礎基本の確実な習得が図られ、生活科・総合的な学習の時間を核とした学びが、子どもたちの教科力の向上に結び付いてきた。

### (2) 地域の変容

地域住民や保護者からは、「学校が地域の中心になって、皆が気軽に集まれるようになった」「子どもたちに背中を押されて地域が動き始めた」「子どもたちと一緒にいるだけで元気が出る」という声が多々寄せられている。

#### ① 学校支援ボランティアの充実

平成21年度以前は、登下校の見守りや安全指導にかかわるボランティアが主だったが、教育環境支援や授業支援にかかわるボランティアが年々増加し、現在では年間延べ15,000人の方々が支援ボランティアとして学校の教育活動を支える体制が構築されている。

#### ② 保護者地域アンケートに見える学校満足度アップ

授業実践、施設設備、生活・学習習慣づくり等、評価アンケート項目で年々学校満足度がアップしている。

## 5 おわりに

地域社会と教育課程を共有し、実践することにより、本校は「地域に応援される立場」から「地域とともに子どもを育て、地域に貢献する立場」へ進化し、学校を核とした地域づくりが進んでいる。

学びを地域社会に開くことにより、子どもたちの主体性や協働性が高まるばかりか、地域住民や保護者にとっての学びが深化し、地域づくりが他人事から自分事に変容し始めている。

教育課程を社会に開くことによって、本校は学校王国を脱し、地域住民、保護者とともにチーム江尻として人口減少の克服と、地方創生へと舵を切った。そこに新しい学校文化が形成され始めている。

グローバルな時代を支えるグローバルな学校・地域づくりが求められている。これからのコミュニティ・スクールは、幼児教育、初等中等教育と生涯学習がパートナーシップを結び、学校を核としたまちづくりの推進役となっていくべきである。そしてそこで繰り広げられる学びは、地域・家庭と協働した学校教育活動を通して、児童を教育的に成長させるとともに、よりよい社会を創るという目標を共有し、皆が未来を形作るための資質・能力を育むものでなければならない。

Think globally Act locally.未来を想像しながら、今できることに向かい合う人々によって新たな学校文化が花開くことを確信する。